＜前回＞オリエンテーション

後期：キリスト教と経済・環境

後期オリエンテーション

３．自然神学の拡張と社会科学

３－１：自然神学とは何か

３－２：自然神学と社会科学

３－３：自然神学の規範的場としての聖書解釈

４．キリスト教思想と経済・環境

４－１：キリスト教思想から見た環境と経済

４－２：聖書と環境思想

　１：創造論から終末論へ

　２：社会的構想力――モデル、ヴィジョン

　３：エコ・フェミニズム 11/20

４－３：聖書と経済思想

　１：経済神学と聖書 11/27

　２：契約思想の射程 12/4

　３：イエス、パウロ、黙示論 12/11

　４：賀川豊彦とキリスト教社会主義 12/18

４－４：現代神学の動向から 12/25, 1/8,22

　１：プロセス神学

　２：政治神学

　３：科学技術の神学

＜前回＞創造論から終末論へ

Dieter T. Hessel, Rosemary Radford Ruether,

Christianity and Ecology. Seeking the Well-Being of Earth and Humans, Harvard University Press, 2000.

「創造論から終末論へ」: 1960 ～ 80 年代→1980年代以降

Q1:聖書・キリスト教は環境破壊の原因か。両者の関連性はいかなるものか。

Q2:聖書・キリスト教は環境破壊の克服にいかに貢献するか。

（２）聖書の創造論と環境：ヒーバート

１．Theodore Hiebert, The Human Vocation: Origins and Transformations in Christian Traditions

(1)創造物語における人間の使命の二つのイメージ(pp.135-141)

・ヒーバートは、創世記第一章(1.1-2.4a)の第一創造物語をＰ資料、創世記第二章(2.4b-3.24)の第二創造物語をＪ資料とする資料仮説に依拠し、それぞれの資料の背景に、それを伝承する社会層（社会的文脈・歴史的文脈）を想定する。Ｐ資料は、古代イスラエルの祭司共同体に関連し、古代イスラエル王権を背景とする。それに対して、Ｊ資料は、古代地中海高地の農民層の経験と結びついている。

・Ｐ資料が描く人間の使命は、「支配」(dominion)という言葉（ラーダ、カーバシュ）、また「神の像」という思想において表明されている。人間の大地に対する関係は、祭司が社会において果たす役割に対応づけられる。

・Ｊ資料の描く人間の使命は、Ｐとは対照的である。人間の原型は、エデンの園を耕す農夫であり、アダム、アダマという用語において示される。ここにおける人間の特徴は、他の動物との連帯・運命の共有という点に認められる。土、命の息という生きた人間の基盤は、動物も共有する（Gen.7:22)。人間の使命は、「耕す」（アーバド）ことであり、それは、「使える」「奉仕する」という大地への従属性において描かれる。

（３）聖書の終末論と環境

A. キャサリン・ケラー

５．キャサリン・ケラー(Catherine Keller)の「もはや海はない―終末のカオスの喪失」(No More Sea: The Lost Chaos of the Eschaton. pp.183-198)の問題提起の意義。

６．キリスト教における tehom（深み・海、カオス）恐怖症(tehomophobia)

・ケラーがまず注目するのは、ヨハネ黙示録 21:1-4 の「もはや海もなくなった」として描かれる終末のヴィジョンである。ここで描かれる「希望」は、自然の救済（自然を救済すること）ではなく、自然からの救済になってしまっている。フェミニスト神学によって批判される「他界的な終末論」(otherworldly eschatology)によって、歴史的地上的なヘブライ的信仰がはかないものと死からの逃避の空想に転化されているという問題。

・このヴィジョン（黙示録的なカオス・海の殺戮）は、現代の現実の海の姿である(186)。

・ヨハネ黙示録で生き生きと描かれる海は、経済的不平等と環境破壊が手を携えて進行する領域であるが、その背後には、古代バビロニアの神話伝統が存在する。

・問題（構築的神学からの）：深みをデーモン化することもあるいは抹殺することもないようなカオス愛好的な(tehomophilic)キリスト教的希望はあり得るのか。

７．カオスをめぐる二つの伝統

・創世記１章の「カオス」から「無からの創造」論へ。カオスの無化。

・聖書には、カオスについての別の伝統が存在する。ヨブ記。

８．環境・体系的な神学（An ecosystemic theology）の課題：「終末論を反復したり斥けたりするのではなく、それを再利用し根拠付け深めること」(192)

９．現代のカオス理論を参照すること(193-195)。

B.バーバラ・ロッシング(Barbara R. Rossing)「新しいエルサレムにおける生命の川：地上の未来に対する環境論的ヴィジョン」

11. ロッシング：シカゴのルター派神学校の新約学の教授、ヨハネ黙示論解釈の専門家。

12. ロッシングの問題意識は、ケラーなどにおいて見られるように、黙示録を非環境論的であると解釈する（黙示録への懐疑論）のとは別の解釈の可能性、むしろ、ヨハネ黙示録を環境論者でフェミニストの新約聖書学者として積極的に読解することを目指している。この点で、まさにケラーとは対照的であり、両者の議論を読み比べることが有益と思われる。「黙示録の目的は人々に強く勧め勇気を与え、神の審判と救済を宣言し、希望と正義のヴィジョンをもたらすことなのである。」(207)

13. そのためにロッシングが注目するのは、黙示録が提示する、バビロンとエルサレムという対照的な二つの都市のヴィジョン､二つの対照的な政治経済学のヴィジョンである。

・ローマ帝国の「現実化した終末論」(永遠のローマ、ローマの平和)。

　ローマ帝国のグローバルな全能性は地中海の海洋交易が支えていた。黙示録は、このローマの全能と永遠性を転倒している。「バビロンの売春の対する黙示録の批判は、性的ではなく、ローマの搾取的な貿易と　経済支配に対して隠喩的に向けられている。」(209)、「奴隷制と奴隷交易に対するもっとも明確な批判」、森林伐採（17:16）

・バビロンに対する新しいエルサレム、「もはや海はない」(21:1)

　ケラーの指摘するような「神話論的な恐れ」は、黙示録にとって、海の主要な批判ではない。「黙示録は海を政治的に描いている」、「悪の場所」「交易船が航海する場所」

　「もはや海はない」＝「ローマの貨物船と交易の終わり」

・別の経済的ヴィジョン、新しいエルサレム・生命の都、新しいエルサレムは環境論的。

　「テキストがわれわれに呼び起こすのは、都市的で環境的な危機、グローバルな市場経済の危機のただ中における神への信頼である。」(214)

・地上における神の家、都市生活のヴィジョン。地上からの脱出（携挙）ではなく、新しいエルサレムは「降りてくる」。都市的ミニストリの新しいヴィジョン

・贈与的経済（a gift economy）：生命の水をすべての人に値なく飲ませる。われわれがエコシステムに対してダメージ　を与えることへの預言者的な批判

・諸民族の癒やし。創世記 3:22 の禁止命令を克服する生命の木のヴィジョン。

＜問題＞

１．メタファー・モデル、ヴィジョンへの注目　→　構想力と人間存在

２．個と共同体とをつなぐ理論はいかにして可能か？　社会的構想力、ヴィジョンの共有とは？

３．テキストの読解に即して。聖書読解の新しい形。

４．キリスト教思想と経済・環境

４―２：聖書と環境思想

２：社会的構想力――モデル、ヴィジョン

＜前回＞より

１．メファファーとモデル：装飾ではなく認知・経験の形態

２．人格モデル・非人格モデル

　　男性モデル・女性モデル

　人間の使命（自然との関わりにおける人間）

　　地の支配と地の僕

３．経験―メタファー・モデル・ヴィジョン―概念・体系的思惟

　　|

　　倫理・行動

（1）メタファー論

１．新しい理論によって乗り越えられるべき古い隠喩論（ギリシアのソフィストに始まり、アリストテレス、キケロ、クインティリアヌスをへて、19 世紀のレトリックについての論考において終わり告げた伝統）を次のようにまとめている（リクール, c, 76f.）。

(1) 隠喩は比喩、すなわち命名に関わる。

(2) 隠喩は言葉の字義的意味からの逸脱による命名の延長である。

(3) 隠喩のこの逸脱の理由は類似である。

(4) 類似の機能は同じ場所で使用可能であるような言葉の字義的意味から借用された言葉の比喩的意味を代用することを根拠付けることである。

(5) 代用された意味はいかなる意味論的な革新も含まない、それゆえ、我々は、代用された比喩的意味に対する字義的言葉を回復することによって、隠喩を翻訳することができる。

(6) 隠喩は革新を認めないのであるから、それは単なる言述の装飾にすぎない。したがって、言述の情動的機能として範疇化することができる。

↓

２．新しい隠喩論は、隠喩を言葉のレベルにおける意味の逸脱としてではなく、文のレベルにおいて可能になる隠喩表現をめぐる複数の解釈の葛藤（相互作用）から可能になる新しい意味論的な革新の問題として捉える試みである。

３．レイコフ：「隠喩は詩人だけでのものではない。それは日常言語に内在し、生、死、時といった抽象概念を把握するための主要な方法なのである」（レイコフ、1994、62）。とくに科学言語における隠喩論が示すように、隠喩は科学における発見の論理に属している。「源泉領域から目標領域への写像」（「人生＝旅」「神＝父」「時間＝お金」）

４．隠喩は、優れて現実の認知・認識（思想と経験の方法・あり方）に関わる問題であり、人間の日常的現実性の中心に位置するのである。

５．リクール：隠喩はそれを使用することによって目標領域のそれまで十分に認知されていなかった構造が顕わにするという機能を有するのであり、それは隠喩の発見的機能に関わる問題である。

６．「私は命のパンである」（ヨハネ 6:22 ～ 59）：イエスについてのヨセフの息子（肉体と持った人間）とパンという意味の多義性ではなく、イエスをについての二つの解釈・見方

の衝突による意味のよじれと、それによって引き起こされる永遠の命をめぐるイエスの出来事についての新しい意味の生成である。こうして、パンとイエスの間に写像が構成され、イエスについての一連の認知が可能になるのである。

７．レトリックの諸形態と認知あるいは思考方法

隠喩（類似関係）―換喩（metonymy、現実世界での隣接関係、空間と時間）

―提喩（synecdoche、意味世界での包含関係、類と種）

瀬戸賢一『レトリックの宇宙』(海鳴社)、『レトリックの知――意味のアルケオロジーを求めて』（新曜社）

↓

これから、人間の基本的な認知構造に関わっているが、特定の宗教を特徴付ける特定の認知構造は存在するか？

ヘブライズムとヘレニズムは、換喩と隠喩の対比と重なるか。ハンデルマン。

Suasan A. Handelman, *The Slayers of Moses. The Emergence of Rabbinic Interpretation in Modern Literary Theory*, State University of New York Press, 1982.（『誰がモーセを殺したか』法政大学出版会。）

In trying to understand further the underlying notions governing Rabbinic thought, let us return to the proposition that Rabbinic thought may be considered as fundamentally *metonymic*, in contract to Greek and Patristic thought, which is essentially *metaphoric*.（76）

武藤慎一『聖書解釈としての詩歌と修辞――シリア教父エフライムとギリシア教父クリュソストモス』教文館、2004 年。

８．宗教的現実・実在（神の国）とはいかなるものか。

言葉の出来事（Sprachereignis, Wortgeschehen）→正典・霊感とは何か。動的霊感説。

上田光正『聖書論』日本基督教団出版局、1992年。

９．隠喩が隠喩と機能するために→「個と共同体」をつなぐ理論構築（イメージとコミュニケ-ジョン）

・語用論：Stephen C. Levinson, *Pragmatics*, Cambridge University Press, 1983.（『英語語用論』研究社出版）

・心理学・認知科学：芳賀純・子安増生編『メタファーの心理学』誠信書房、1990年。

山梨正明『比喩と理解』（認知科学選書17）東京大学出版会、1988年。

・「意味論というのは、問題となっている表現の文字どおりの意味、あるいは言語規則的内容の特性を表示するだけのものである。語用論のほうは、、意味論から得られる意味表示に、文脈から得られる詳細の情報を加え、それによって、メタファー的解釈を与えることをしなければならないであろう。」（レヴィンソン、190）

・「メタファーの解釈は、類推的にものを考えてゆく我々の一般的能力の特性に依存しなければならない。」（196）

・「心理学の理論からかなり大きな助けを借りない限り、言語学的語用論だけでそのような一般的理論を提供できると考えることはできないとしてよいであろう。もし分業ということが考えられるなら、心理学者の仕事は、類推に関する一般理論を提供することであり、他方、語用論学者の仕事は、そのような解釈を受けるような発話を特定し、どのようにしてそれらが認定され構成されるのかということを説明し、そしてそれらが用いられるときの条件を説明することになるであろう。」（196-197）

（２）モデル論

１．言語世界／心的世界／実在世界（日常性・生活世界など）／宗教言語の指示世界における隠喩、モデルの位置づけ。

語／隠喩／テキスト：言語の諸階層１→連辞

隠喩／モデル：言語の諸階層２→範列

↓

・syntagm（連辞）〈metaphor-narrative〉→パロール→諸要素の結合規則とその構造
　線的、連鎖的な言述順序。テキストは全体として連辞と見なされる。連辞内の諸要素が、前後の諸要素との関係でそれぞれの価値を獲得する。

・paradigm（範列）〈metaphor-model〉→ラング
　特定の構造によって特徴付けられた体系内の他の諸要素との関係。テキストはこの体系に属する諸要素の部分的な表出。所与の体系に所属する諸要素の集積が範列。

Daniel Patte, *What is Structural Exegesis ?* , Philadelphia, 1976.

２．モデル：隠喩を構成要素として成立する上位の構造体。隠喩から構成されるの範列的秩序。モデルは、根底的隠喩（root metaphor）を核として、その周りに類似した隠喩を結合している。一定の隠喩表現を核としてその回りに構成された隣接する隠喩群・隠喩群のネットワーク。

３．Ricoeur, *Biblical interpretation*

Max Black, *Models and Metaphors. Studies in language and philosophy*, New York,1962.

Sallie McFague, *Models of God. Theology for an Ecological, Nuclear Age*, Fortress, 1987.

The differences between a metaphor and a model can for our purpose be simply stated: a model is a metaphor with "staying power". A model is a metaphor that has gained sufficient stability and scope so as to present a pattern for relatively comprehensive and coherent explanation. （34）

４．Tillich: *Systematic Theology vol.1* ,1951

The symbols "life," "spirit," "power," "love," "grace," etc., as applied to God in devotional life are elements of the two symbols of a person-to-person relationship with God, namely, God as Lord and God as Father. Other symbols which have this ego-thou character are represented by these two. Symbols like "King," "Judge," or the "Highest" belong to the symbolic sphere of God as Lord; symbols like "Creator," "Helper," "Savior," belong to the symbolic sphere of God as Father. There is no conflict between these two symbols or symbolic spheres.

They cannot be separated.

The Lord who is not the Father is demonic; the Father who is not the Lord is sentimental.

Theology has erred in both directions.

God as Lord and the related symbols express the holy power of God.

the unapproachable majesty of God , the infinite distance between him and the creature, his eternal glory,

"Lord" is a symbol for God's governing of the whole of reality according to the inner telos of creation, the ultimate fulfilment of the creature

"Father" is the symbol for God in so far as he justifies man through grace and accepts him although he is unacceptable. sustaining creativity, directing creativity, holy love as the creative ground of being, of man's being the unity（286f.）

５．モデルの特性として

①モデルの複数性（まず現象学的に確認・記述され、次に理論的に＜存在論的に＞相互に位置づけられ関連づけられる）

②モデルの複数性→神経験の複数性

モデル・レベルの非排他性・相補性（多様性の承認）と概念レベルの排他性

cf: 人格と非人格（ヒック）

③キリスト教の伝統的な「神のモデル」の複数性と基本的性格（男性モデル）

６．神モデル：人格モデル ／ 非人格モデル

男性モデル ／ 女性モデル

王モデル／父モデル

７．人間モデル（自然との関わりにおける）:「地の支配者」と「地の僕」

→ 人間の実践領域・倫理

（３）社会的構想力

１．イデオロギーの三つの次元

現実の転倒としてのイデオロギー／正統化としてのイデオロギー／象徴的統合化・自己同一性としてのイデオロギー

象徴体系によって行動は媒介される、行動は意味の了解を前提とする。世界を理解し行動するには意味世界をイメージにもたらす象徴体系を

現実（集団と個人の）を保持するイメージ、社会的行動を律する秩序形式を保持する構想力

↓

保守的効能

２．ユートピアの諸次元

・病理としてのユートピア／批判としてのユートピア／可能性の領域を開くユートピア

・歴史的現実とは異なる現実（本来性？）を描き共有する能力

↓

「異端的」と呼ばれた民衆運動は何だったのか

キリスト教史の根本問題

３．生の弁証法：自己同一性と自己変化　→　成長する、あるいは生きている

４．信仰は究極的にはイデオロギーかユートピアかの二分法の拒否である。

自己同一性は信仰に基づく

「あなたの神である主を愛する」→「あなた」と「神」の相関性としての信仰

信仰は、自己同一性に形を与えそれを保持する、と同時に、自己同一性の転換を可能にする。

↓

終末論あるいは希望の弁証法：希望のヴィジョン

すでに、そしていまだ

↓

５．自己同一性と自己変革（ミメーシスの弁証法）

６．イメージの共有、

７．象徴・言語・構想力という視点から理論を再構築すること。

８．アーレントのカント論

Hannah Arendt, *Lectures on Kant's Political Philosophy*（edited and with Interpretation Essay by Ronald Beiner）, The University of Chicago Press, 1982（1992）.

In the center of Kant's moral philosophy stands the individual; in the center of his philosophy of history（or, rather, his philosophy of nature）stands the perpetual progress of the human race, or mankind.（58）

The solution to this riddle: Imagination, the ability to make present what is absent, transforms the objects of the objective senses into 'sensed' objects, as though they were objects of an inner sense. This happens by reflecting not on an object but on its representation. The represented object now arouses one's pleasure or displeasure, not direct perception of the object. Kant calls this "the operation of reflection."（65）

The very act of approbation pleases but the very act of disapprobation displeases. Hence the question: How does one choose between approbation and disapprobation? One criterion is easily guessed if one considers the examples given above; it is the criterion of communicability or publicness.　... The criterion, then, is communicability, and the standard of deciding about it is common sense.（69）

We now conclude our discussion of common sense in its very special Kantian meaning, according to which common sense is community sense, *sensus communis*, as distinguished from *sensus privatus*.　... in this persuasive activity one actually appeals to the "community sense." In

other words, when one judges, one judges as a member of a community. It is in "the nature of judgement, whose right use is so necessarily and so generally requisite, that by the name of 'sound understanding'［common sense in its usual meaning］nothing else but this factually is meant."（72）

We turn now, briefly, to §41 of the *Critique of Judgement*. We saw that an "enlarged mentality" is the condition *sine qua no* of right judgement; one community sense makes it possible to enlarge one's mentality. ... imagination and reflection enable us to liberate ourselves from them（private conditions）and attain that relative impartiality... communicability....sociability （73）

Most concepts in the historical and political sciences are of this restricted nature; they have their origin in some particular historical incident, and we then proceed to make it "exemplary" --- to see in the particular what is valid for more than one case.（85）

（4）キリスト教思想史の事例に即した研究

黙示文学、知恵文学、神秘主義・・・・
民衆的異端運動
↓
エコ・フェミニズム

＜参考文献＞

０．芦名定道『ティリッヒと弁証神学の挑戦』創文社。
「現代思想とキリスト論」、水垣渉・小高毅編『キリスト論論争史』2003 年、日本キリスト教団出版局、pp.529-567。

１．Paul Ricouer：
a. *La métaphor vive*, Seuil, 1975.
b. "Biblical Hermeneutics (*Semeia*. 4, the Society of Biblical Literature)," 1975, pp.27-148.
c. *Interpretation Theory: Discourse and the Surplus of Meaning*, The Texas Christian University Press, 1976.
d. "Listening to the Parables of Jesus," in: Charles E. Reagan, David Stewart(ed.), *The Philosophy of Paul Ricoeur. An Anthology of His Work*, Beacon Press, 1978.

２．Sallie McFague, *Models of God. Theology for an Ecological, Nuclear Age*, Fortress, 1987.

３．Paul Tillich, *Systematic Theology*, Vol.1-3, The University of Chicago Press, 1951/57/63.

４．George Lakoff and Mark Johnson, *Metaphors We Live By,* The University of Chicago Press, 1980.
George Lakoff, "The contemporary theory of metaphor," in: Andrew Ortony（1993）, pp. 202-251.
ジョージ・レイコフ、マーク・ターナー『詩と認知』紀伊國屋書店、1994 年。

５．Andrew Ortony（ed.）, *Metaphor and Truth*（Second Edition）, Cambridge University Press, 1993.

６．Janet Martin Soskice, *Metaphor and Religious Language*, Clarendon, 1985.

７．William Schweiker, *Mimetic Reflections. A Study in Hermeneutics, Theology, and Ethics*, Fordham University Press, 1990.